

「どのように死と向き合うのか？」

@御徒町マスジドにおける 2018.4.13.金曜フタバ要約 by 杉本恭一郎

「すべての魂は、死を味わうのです」(クルアーン 3 章 185 節)。「生きたい」と願うことは人間の根源的欲求ですが、アッラーの被創造物はいつかひとつ残らず死にます(滅びます)。ではわたしたちは、どのように死と向き合えばいいのでしょうか。この質問に対する答えにイスラームの教えのユニークな点があります。

来世の存在を信じることは、イスラーム信仰箇条の1つです。2 章 3~4 節いわく「(信者たちは) 目に見えないものを信じ、礼拝を行ない、われら(アッラー) が与えたものから施す人たち、あなた(ムハンマド)に啓示されたものと、あなた以前に啓示されたものを信じ、そして来世のあることを確信する人たちです」とあります。死があるから来世がある、もしくはその逆かもしれません。死後の行き先がある、とりわけ楽園に入りたいという願望は、現世を生きる強い動機付けとなります。そのために、ムスリムはアッラーや来世を信じ、礼拝や施しなど多くの善行を積むようにテストされていると考えるのです。

イスラームにおいて死は災難ではありません。なぜなら死後、人間は復活するとムスリムは信じているからです。死は来世での生活へと転換点にすぎないのです。ではアッラーはどのように死者に命を与えるのでしょうか？クルアーン 2 章 260 節に記されています。「イブラーヒームが、わたしの主(アッラー)よ、あなたが死者にどのように命(魂)を与えるのかわたしに見せてくださいと言ったとき、主は言いました。あなたは信じていないのですか。かれ(イブラーヒーム)は言いました。いいえ、ただわたしの心を安らげたいのです。かれ(アッラー)は言いました。それでは 4 羽の鳥をとって、それらを(呼ぶと)あなたに戻ってくるよう訓練し、1 羽ずつをそれぞれの丘の上に置いてそれらを呼びなさい。それらは急いであなたのもとに来るでしょう(同様に魂も死者に戻る)」とあります。

わたしたちは、生まれたときアザーン(礼拝への呼びかけ)をします。でも礼拝はしません。逆に死んだとき葬儀の礼拝をします。でもアザーンはしません。なぜなら、生まれたときのアザーンは、死ぬときの礼拝とセットになっているからです。つまりわたしたちの人生は、アザーンと礼拝の間の時間ほどしかないという意味です。例えば、洞窟章 18 章 25 節には、信仰を守るため長い眠りについた青年たちが、どれだけ睡眠していたかを問答する場面がありますが、太陰暦で 309 年間も眠りについていたと言う意見があった一方、同章 19 節には「あなた方は(洞窟に)どれほどいたのですか。かれらは言いました。わたしたちは 1 日、もしくは 1 日未満留まりました」とあります。ターハ一章 20 章 102~104 節では、「ラッパが吹かれる日、この日われら(アッラー)は、青い目(盲目)の罪深い人たちを召集します。かれらは互いにつぶやいて、あなた方は 10 日しか(現世に)いませんでしたと言います。われら(アッラー)は、かれらが言うことを最もよく知っています。かれらの中で言動共に最良の人は、あなたたちの滞在は 1 日しかなかった、と言うでしょう」とあり、現世の生活は 10 日か 1 日程度しかないと感じるのです。

短い滞在においては、長期的な投資が効果的です。アブーフライラーが伝えたところによると、アッラーの使徒はこう言いました。「ある人が亡くなる時、3 つを除いて、かれの善行の蓄積は終わります。つまり、持続的な施し(サダカ・ジャーリヤ)、有益な知識、故人のために祈願する敬虔な子供です」(サヒーフムスリム Book 25, Hadith 20) 例えば、マスジド建設、孤児院の建設、学校の建設、病院の建設、孤児を養子にすること、イスラーム教育、クルアーンを教えること、イスラーム関連書籍の出版することなどがあります。この人生は猶予期間でもあるので、第 2 の人生が始まるまでの忍耐の期間でもあります。時間章いわく「時間にかけて(誓います)。確かに人間は損失を被っています。ただし信仰し、善行に努め、互いに真理を勧め合い、また忍耐を勧めあう者たちを除いては」なのです。